

社会的意味の計量分析：ウェーバー「暴力」論のテキストマイニング

神戸大学大学院 橋本直人

「暴力」に関わる現象は、今日の社会学において最も多く論じられるテーマの一つであろう。実際、「暴力」現象の具体的な様相をめぐっては、ミクロレベルでの家庭内暴力やいじめからマクロレベルでの構造的暴力や象徴的暴力、さらにより抽象度の高い「近代的理性」や物語の「暴力性」にまで及ぶ多種多様な分析が提示されている。そしてこの多様性は、確かに「暴力」概念が有する豊かさの一つの成果ではあるだろう。だが、この多様さは同時に、我々が「暴力」という概念によって何を意味しようとしているのか、その明確さについての反省を求めているように思われる。このことは、ひるがえって社会学の理論構成において「暴力」概念が必ずしも的確に位置づけられていないこととも対応してはいないだろうか。もちろん「暴力」を重要な主題とした社会学理論は様々に存在するが、そこで社会秩序の形成にとって暴力がどれほど本質的な契機であるのか、社会にとって暴力とはいかなる現象であるのか、という概念規定の基礎的な面において、十分に明確な説明が与えられているとは言い難い。

こうした状況からすれば、「暴力」概念についての歴史的な反省の第一歩として、社会学理論の古典にさかのぼって「暴力」概念を再考することにも一定の意味があるだろう。

そこで本報告では、以上の観点から社会学の古典の一つであるマックス・ウェーバーを取り上げ、ウェーバーのテキストにおける「暴力 Gewalt」概念の位置について、テキストマイニングの手法と意味解釈とを組み合わせる形で分析したい。

近代国家についての有名な規定（一定領域内での正当な物理的暴力行使の独占）にもみられるように、ウェーバーは「社会学の創設者たち」の中でも「暴力」についてしばしば論じた理論家である。実際、この規定から始まる講演『職業としての政治』の後半は「暴力に対する態度・関わり方」を主題の一つとするとよい。

とはいえ、詳細に見ればウェーバーの「暴力」概念にももちろん多様な側面があり、決して単純な解釈を許すものではない。特にウェーバーにおける Gewalt の問題がしばしば政治と宗教との関係の焦点として登場する（しかも「隣人愛 vs. 物理的暴力」という単純な図式にとどまらない）ことは見逃されるべきではないだろう。

報告者の私見では、こうした多様性を包含し、かつ一定の理論的な見通しを得られるように分析するためには、テキストについての伝統的な意味解釈に加え、テキストマイニングのような計量分析的手法を用い、両者の統合的な分析が有用であろうと思われる。こうした分析により、解釈者の偏りを低減しつつ多様な側面を分析することが可能になるであろう。

したがって、本報告では（やや欲張りではあるが）以下の3点を目的とする。

- ・ウェーバーの Gewalt 概念の位置を（その多様性も含め）分析すること
- ・分析に際して意味解釈と計量分析という二つの手法の統合を試みること
- ・こうした学説史研究が現代の理論にも一定の示唆を与える可能性を提示すること

なお、文献等は当日に配布する詳細なレジюмеにて提示する予定である。